

書物のなかの彗星

杉 岳志

はじめに

近世の人々にとって、彗星の出現はいかなる意味を持つ出来事だったのだろうか。そして、彗星は人々の意識や行動をどのように規定したのだろうか。近世の日記に天文現象の記事が頻出することから浮かんだこの素朴な疑問の解明を目指し、筆者はこれまで事例を蓄積してきた。⁽¹⁾ 彗星を

照するという行為である。そもそも近世に至るまで、彗星出現時に書物を参照できるのは、公家や僧侶等ごく一部の人々に限られていた。これが民衆にまで広まる契機となつたのが、近世に成立した商業出版であることはもはや多言を要すまい。

では、人々はどのような書物を参照したのか。これがなかなかの難問である。何といっても、彗星出現時に参照した書物の記録を残した近世人の数がごく限られている。読書記録や蔵書目録を手掛かりに個人の読書行為総体を追究する近年の読書研究の手法⁽²⁾で明らかにできる事例もあるかもしれないが、この場合も、大多数の人々については何も語ることができない。

この非日常的な現象を理解しようと努めた。

彼らの示した反応の中で最も近世的なのが、書物を参

そこで本稿では発想を転換して、どのような書物を読

んだのか、ではなく、どのような書物を読み得たのか、そしてどのような彗星観を獲得する可能性があつたのかを考えてみたい。これは、彗星に言及する書物を悉皆的に取り上げるという意味ではない。版を重ねた刊本と写本も存在しない自筆本を同列で扱つてしまつては、前者の影響力を過小に、後者の影響力を過大に評価することにもなるだろう。本稿の課題に即して採るべきは読者の立場⁽³⁾であり、検討対象は読まれる可能性の高かつた書物でなくてはならない。そこで対象は原則として刊本とし、伝本数を指標とした。⁽⁴⁾

とはいへ、原則として代金さえ支払えば書物を入手できる今日と当時では事情が異なつており⁽⁵⁾、本稿で取り上げた書物全てを一人の人物が参照できたという訳ではないことは強調しておきたい。また、本稿はあくまで現時点での作業に基づく研究ノートに過ぎず、遺漏も少なからずあることをあらかじめお断りしておく。

1 『天文図解』

『天文図解』の著者井口常範は前田甚右衛門なる天文暦学者の弟子で、京都で医師を生業とした後、江戸へ下つて水戸藩に仕えたという。⁽⁷⁾ 発行部数等は明らかではないものの、天文を論じる者は挙つて本書に依拠したと本書の注釈書『天文図解発揮』(元禄六年(一六九三)自序)には記されている。⁽⁸⁾ 伝存する点数も多く、広範な読者に迎えられたとみてよからう。

彗星に関する記述は、「天体総論」の注の部分に登場する。

奇星

彗星ノ類ナリ、世人流星・流火ヲ星ト称ス、

貞享

^(二年)

丑二月二十二日ノ夜、流火有リ、専ラ天狗星

落ツト云者アリ、非ナリ、卷末ニ於テ此論ヲ挙ゲ、夫レ天ハ宗動ナルヲ以テ、時ニ異星アラハル、異ナ

渢川春海の『天文瓊続』が知られるが⁽⁶⁾、いずれも刊行されていないことから、本稿では検討対象としない。ここで最初に取り上げるべきは、元禄二年(一六八九)に刊行された『天文図解』であろう。

一 天文書

近世前期の天文書としては小林謙貞の『二儀略説』や

ルガ故ニ七政ノ行ニ同カラズ、古今怪星出テ吉アリ

凶アリ、吉凶スペテ常ナリ、古人日蝕ヲ変ト記ス、古曆疎闊ノ故ナリ、今既ニ蝕ヲ常トス、物トシテ其数ヲ遁レサル故ナリ、彗星ノ属ヒ推シテ知ルノ術有ン、後人ヲ俟ノミ⁽¹⁰⁾、（傍線引用者。引用史料は適宜現行の字体に改め、振り仮名は原則として省略した。以下同様）

常範はまず流星・流火を星とする説を否定し、常とは異なる星は天が休みなく動く故に現れると説く。注目すべきはその次の傍線部の主張で、古来変事とされた日蝕がもはや予測可能となつたのだから、いつか彗星なども出現が予測できるようになるだろうといふ。

この常範の彗星観は今日から振り返れば正しかつたわけだが、これが当時の社会へどれほど浸透したのか、はつきりしたことはわからない。そもそも、彗星の出現を変事と見做さなければ記録に残される可能性は自ずと低くなるわけで、今日まで伝わった記録から浸透の度合いを割り出すことなど不可能だろう。ただ、同じような説を採つた人物が存在したことは間違いない。その証拠として、荷田在満の『彗星私弁』（寛保四年〈一七四四〉奥

書）を紹介しておく。

蓋し上世日触を恐る、今世彗星を恐ること甚し、然るに暦術詳らかなるにより、数百歳後の触と雖も亦皆前に知る、是以て其の蝕、人君の不徳に出でず、又国家を害すこと無し、童蒙と雖も皆之を知る、今に至り則ち人君を恐すこと能はず、彗星亦日蝕の類のみ、然れども未だ其の見るるを推すの術を知らず、抑も氣聚て時に臨みて見るる者か、未だ其の由る所詳らかならざると雖も、彗星に因つて禍を言ふべからず⁽¹¹⁾、（原漢文。訓点に従つて読み下した）

引用したのは末尾の部分で、この前段部分では、彗星が出現しなくても様々な禍が生じるのだから彗星が禍の前兆であるはずがなく、かつて彗星が禍の前兆とされたのは人君の行いを戒めるためであつたと説明されている。その根拠が、今や数百年後までも予測可能となつた日蝕であった⁽¹²⁾。そして在満は常範と同じように、彗星は日蝕と違つてまだ出現の予測方法がわからないだけなのだ、と主張する（抑も氣聚て…）の一節については後述）。

果たして在満は全くの独創でこのような考えに達したのか、それとも『天文図解』を読んでいたのか。史料か

ら裏付けられない以上いすれとも定めがたいが、同時代の安藤昌益が『天文図解』を読んでいたことから考へても、在満の彗星観が『天文図解』を通して確立された可能性は十分にあるだろう。

2 『初学天文指南鈔』

次に、『初学天文指南鈔』（宝永三年（一七〇六）刊）を取り上げる。著者の馬場信武は井口常範と同じく京都の医師で、初め尾田玄古と名乗つていた。⁽¹⁴⁾ その著作は天文よりもむしろ易学関係の方が多いが、残存点数から判断すると、本書はかなりの部数が出回つたと考えられる。こちらは『天文図解』に比べるとかなり該当箇所が長い。適宜省略して、次に引用する。

彗・李總叙

① 流レ隕ル彗・李ハ皆火ナリ、^②火氣下ヨリ土ヲ挿ン
デ上リ升ル、其上ル時陰雲ニ遇バ雷ト成ル、^③陰雲
ニ遇ザレバ雷電ヲナサズ、空ヲ凌ア直ニ突テ火際ニ
至リ、火自ラ火ニ帰ス、其火ノ挿ンテ上ル土、輕微
ニシテ熱燥ナリ、或ハ亦炱煤ノ如クニシテ、勢ヒニ

乘シテ直ニ衝上ツテ、火ニ遇テ便チ燃ユ、其状葉ノ
引ガ如シ、今夏月ニ奔ル星是ナリ、（中略）⁽⁴⁾ 或ハ落
下シテ地ニ至リ、即チ石ト成ルアリ、（中略）⁽⁵⁾ 土
が流星・隕石の場合よりも—（引用者注）若シ更ニ精
ク厚ケレバ、結ヒ聚ツテ散ゼズ、晶宇ニ附テ即チ彗
・李ト成ル、彗ハ長シテ李ハ大ナリ、故ニ久ク散ゼ
スシテ天ニ隨テ転ズルナリ、或ハ光アツテ刺出テ
鋒ノ如キヨ芒ト云、芒長シテ四方ニ出ルヲ角ト云、
芒長シテ偏ヘ出ルヲ彗ト云、彗ノ芒ヲ正簾ト云、晨
ニ東方ニ見ユレバ芒スナハチ西ニ指ス、夕ニ西方ニ
見ユレバ芒則チ東ニ指ナリ、シカフシテ日久クシテ
勢ヒ尽カラ衰ヘテ、漸ク乃チ微ニシテ滅ス、故ニ彗
・李百日ト出テ居ル事ナシ、早ク滅ル者ナリ、⁽⁶⁾ 凡
ソ彗將ニ見ヘテ、必ず多ク大風・大旱ナリ、是燥熱
空中ニ横満スルニ縁テ、容易風ニ変ズルナリ、イマ
ダ湿氣ヲ帶サルトキハ変ジテ雲トナル事アタハズ、
⑦ 年荒テ旱スル事ハ、彗燥熱ヲ以テ、ヨク地上饒沢
ノ氣ヲ吸フ故ナリ、⁽⁸⁾ 又多ク震コトヲ主ルハ、彗上
ニアツテ氣ノ緊キヲ吸ヲ以テ、地中ノ氣出ント欲シ、
搖動スル所以ナリ、⁽⁹⁾ 又災病ヲ主ルハ、彗以テ燥氣

ヲ吸動シテ、人間水沢ノ処ニ流動スル故ナリ⁽¹⁶⁾、（後

略）（丸番号は引用者。以下同様）

本書では彗星・孛星は星ではなく火とされ（傍線部①。以下、丸番号のみ記す）、呼称から「星」が削除されている。彗・孛發生のメカニズムは次の通りである。

（一）火氣が土を挟んで地表から上昇し、雲に遭遇すると雷となる（②）。

（二）雲に出会うことなく上昇した火氣と土は「火際」に到達する。土の量が少なければすぐに

発火して、「奔ル星」、すなわち流星となる（③）。

（三）流星が地上まで落下すると隕石となる（④）。

（四）土の量が多ければ結集し、彗・孛となる（⑤）。

この説に従えば、彗・孛だけでなく雷・流星・隕石もその本質は火氣と土氣であるという。そして、彗の燥熱が空中に充満して風に変じることで大風が生じ（⑥）、地上の水氣が吸われて旱魃となり（⑦）、地中の気が引き寄せられて地震が発生し（⑧）、引き寄せられた燥気が人々の居住地や水辺を流れ動くので病の原因ともなる（⑨）。この合理的な説によれば、彗出現後の災害発生は必然で

あつた。

上記の説は、彗星が出現しなくても災害は生じるではないかという荷田在満の反論には答えられないとはいえない現象の発生が見事なまでに体系化されている。我々は彗星が軌道を持つ星だと知っているから容易に退けることができるが、当時にあつては十分に説得力を持つ議論だつたと思われる。

では、本書の作者馬場信武はどうやってこのような彗星観に到達したのだろうか。結論を先取りして述べてしまふと、実は先の文章は信武が諸説を吟味して執筆したものではなく、中国の天文書『天經或問』を読み下したものであつた。信武は③と④の間に「俗ニ是ヲ夜バイ星ト名ヅク、コレ星ニテハナシ、火氣ナリ、故ニ夏多クアリテ冬希ナリ」及び「貞享乙丑ノ年二月二十二日ノ夜、辰巳ノ方ヨリ丑寅ノ方ヘ行シハ是ナリ」と流星に関する文章を挿入したに留まり、独自の説は皆無に等しい。『初学天文指南鈔』の彗星観は『天經或問』の彗星観といつてよいだろう⁽¹⁷⁾。

『天經或問』（游藝著、施蒙单闋（一六七五年）序）は西洋天文学を漢訳した書物で、そのため日本では禁書扱

いとなつたものの、早くから流入して渋川春海や西川如見の天文書に影響を与えた。また、享保十五年（一七三〇）には如見の息子正休によって訓点本が出版され、広く流布した。そのため、近世日本において最も影響力を持った天文書との位置付けが与えられている。⁽¹⁸⁾

学問上の影響力という観点に立てば、それは極めて妥当な評価だろう。しかし受容の側面からみた場合、実は『天經或問』の影響を過大視してきた可能性もあるのではないか。筆者はこれまで彗星を「氣」とする記述に出くわすと、その人物は『天經或問』を読んだものだと思いつ込んでいた。しかし内容だけでは、その人物が接したのは『天經或問』と『天經或問』の説を引用した書のいずれなのか、判断の仕様がない。先に引用した荷田在満の文章中にある「抑も氣聚て時に臨みて見る者か」との一文も、どの書物に依拠して書かれたのかわからないのである。『初学天文指南鈔』が『天經或問』の彗星觀普及に果たした役割は、想像以上に大きかったのかもしない。

3 『天文義論』

長崎の町人学者西川如見は天文に関する著作を多く残し、『天文義論』（正徳二年（一七二二）刊）・『両儀集説』（正徳四年（一七一四）自序）・『怪異弁断』（外題『天文精要』、正徳五年（一七一五）刊）で彗星に言及している。このうち刊行されているのは『天文義論』と『怪異弁断』で、執筆のスタイルに違いはあるものの、彗星に対する見方には違いがみられない。そこで本稿では『天文義論』の全文を掲載する。⁽²⁰⁾ただし、国立公文書館所蔵写本しか調査できず、刊本を参照できなかつたことをお断りしておかねばならない。

問マ 彗星ノ類ノ妖星色色アリ、皆天地ノ変災トス、
近世ハ変災ト不レル為ト云リ、客星ニハ瑞星ト妖星ノ
替リ有ト云トモ、^①近代ハ皆常トシテ変異ト不レ為、
吉凶ヲ不レ論ト云人アリ、又或天文者ノ言ルハ、客
星・彗星ノ類、何レトモ常数可レ有者也、後世ニ至
テ、必ス算術ヲ以フ、常数ヲ得ル事アラント云リ、
此義如何ミ、

曰々、漢書等ニハ鎮星・歲星・熒惑等変シテ彗・孛ノ類ト成シヨシ見ヘタリ、然レトモ今來ハ此義ヲ不レ信セ、如何ント云ニ、天ノ五星ハ地ノ五行ノ主ニ非ス乎、若シ天ノ五星ノ中一星變シテ異星ト成ルコトアラハ、天ノ五行ノ中一行亡滅スル者也、一行亡滅セハ、残ル處ノ四行モ豈全キ事有ンヤ、漢書ノ意ヲ按スルニ、五星ノ本体彗星ニ変スト云ニハ非ス、歲星・熒惑等ノ精氣ヨリ彗星ヲ變化スト云事ナラン、五星今猶五ナカラ天ニ在リ、其本体終ニ不レ変ガ故ナリ、古ハ五星ノ算法未ダ不レ備⁽²⁰⁾、動キスレハ五星ヲ過リテ客星トシ、水星ヲ以テ瑞星ト為シ事アリシ、元朝已來五星ノ算術全ク備リシ故ニ此過チ無シ、⁽²¹⁾客星ノ類ハ真ノ星ニハ非ス、其出現ノ天モ真ノ天ニハ非ス、中氣之所ニ在テ甚卑キ者也、其出現ニ定數可レ有ノ理ナシ、豈算術ヲ以テ推コトヲ得ン、⁽²²⁾彗・孛ノ類ハ皆大地ノ燥熱・火毒上ニ発騰シテ彗星ト成リ、未夕其勢ヒ微ニシテ下部ニ在者ハ流星ト成ル、都テ彗星ノ類ハ火毒ニシテ、其勢強大ナルカ故ニ大 地ノ水氣ヲ涸乾セシムル性ナリ、故ニ万物ノ為ニ凶氣ナリ、是⁽²³⁾以テ彗星ハ飢饉・疫癆ヲ主トルト云リ、

都テ客星・彗星・流星ノ類ハ皆落テ石ト成コトアリ、委ハ予⁽²⁴⁾怪異弁断ニ記ス、⁽²⁵⁾まずは、①で彗星・客星（普段は現れない星。新星や尾の見えない彗星等）出現の法則性に関する問い合わせていることに注目したい。管見の限り正徳段階でこのような議論を繰り広げた天文書は『天文図解』以外に見出せないので、これは『天文図解』を念頭に置いた設定ではないかと思われる。

これに対しても如見は客星と彗星を別々に取り上げ、客星については、「真ノ星」ではないため出現を予測することができるはずがないと一蹴する（②）。とはいっても、何故本当の星ではないといえるのか、一言も説明されていない。この点は『怪異弁断』も同様で、「客星ハ真ノ星ニアラザル故ニ」と記すのみである。⁽²²⁾

一方彗星については『天經或問』の説を採用し、大地の水気が涸れるため飢饉や疫病が発生すると説く。飢饉を生じさせるとの指摘は『天經或問』にはみられないが、彗星による天候不順の結果飢饉が生じると考えて、このように記したのだろう。

彗星と災害発生の関係を気の原理で捉え直した『天經

或問』の説は如見の後の天文家にも広く受容され、西川正休の『大略天文学名目鈔⁽²³⁾』（享保十五年（一七三〇）刊）・西村遠里の『天經天学⁽²⁴⁾』（安永七年（一七七八）刊）・高井晒我（蘭山）の『訓蒙天地弁⁽²⁵⁾』（寛政三年（一七九一）刊）といつた啓蒙的な天文書は彗星氣説を採用している。近世中期の天文書は彗星氣説一色だつたといつてよいだろう。

4 『和蘭天説』と『刻白爾天文図解』

洋画家・銅版画家としてその名が知られる司馬江漢は蘭学にも通じ、西洋天文学を紹介する書物を著した。その主要なものに、『和蘭天説』（寛政七年（一七九五）刊）と『刻白爾天文図解』（文化五年（一八〇八）刊）がある。両書の彗星観には違いがみられるため、ここでは両方とも取り上げることとした。

それでは、『和蘭天説』が彗星をどのように説明しているのかみてみよう。

彗星・孛星、霾ト理ヲ同ス、^① 地上ノ土氣空ヲ凌デ
冷際ヲ過テ、熱際ノ天ニ至ル、此天ハ水氣不レ至ノ

天ナリ、地氣ノ土砂ハ琥珀ノ芥ヲ拾ガコトシ、微塵相聚テ貌ヲナス、殊ニ大小アリ、其土勢大ニ盛ナルモノハ、墮ルニ至テ声ヲナス、飛テ光ヲナス者、皆其土勢衰ヘ尽テ滅ルモノ、亦散ジ失ウ者アリ、墮ルモノアリ、星落テ石トナル、此モノ皆日ノ光ヲ借テ輝コト星ノゴトシ、夏月流星尤多シ、冷際ノ上、熱際ニ係リアルト雖、地ニ近キノ際ナリ（俗ニ云光モノ）、日輪ニハ遠シ、經緯ニアル列座ノ諸星ハ、万古増減ナシ、一星ゴトニ大地ノ十陪ナリ、若降下セバ、此世界ハ圧翻スベシ「古ノ説ニシテ、彗星・孛星・流星ハ天ニ戾ルノ炎氣、旋転界ニ凝結シテ、星ノコトシト云、^② 火氣ニアラズ、火氣体ヲ作バ、昼之ヲ見ベシ、日光ヲ借テ光ヲナスモノナリ、○^③ 蘭書中二、彗・孛ハ星ナリ、霾ノルイニ非ズ、水・金ノニ星ノ外環アリ、隋円ヲナス、故ニ數十年ヲ経テ現レ之、彗ト孛ハ一星ニシテ、彗ハ横ノ地ニ向イ、孛ハ端地ニ向フ、彗星ノ尾ハ、土星ニ隋円ノ光芒アルガ如ク、小星相聚テ光リヲ作歟、其星本星ヲ運旋シテ、地上コレヲ見レハ、彗ト孛ノ形ヲ作ナリ、如レ図（図なし・引用者注）」⁽²⁶⁾、〔〕内は割注。以

下同様)

表題に「和蘭」を掲げる書物ながら、本文では江漢も彗星の出現を気の原理で説明する（①）。だが、彼は『天經或問』の説をそのまま引用するのではなく、考察を加えて彗星を土氣とした。火氣ならば日中も発光しているはずなのに、夜間にしか目撃できないためである（②）。ここまでであれば『天經或問』の説の改良に留まり、

これまでの天文書と大して違はない。本書の特徴はそ

の次の箇所、彗星・孛星は橢円状の軌道を持つ星であり、それ故数十年を経て再び出現するという西洋の新しい説を紹介した③にある。この説に基づけば、彗星は早魃等の災害とは無関係ということになろう。

江漢はこの新しい説を、親交のあつた幕府の通詞本木良永（地動説の紹介者として知られる）から得たものと考えられる⁽²⁷⁾。とはいえ、この西洋近代天文学の彗星観は割注末尾での新説紹介といった位置付けしか与えられていない。江漢自身、この新説に確信を持てなかつたのだろう。

十三年後に出版された『刻白爾天文図解』ではもはや彗星氣説は姿を消し、彗星の軌道が描かれた図と「一、

彗星ノ環ハ橢円ニシテ、一方ハ水星環ト金星環トニ係テ、一方ハ恒天ノ高キニ係リ、彗星ノ尾ハ金星或ハ火星近ク係リタル時、日輪彗星ノ影ヲ照ス、尾ノ長短ハ火星・金星・彗星ノ躔度ニヨレリ⁽²⁸⁾』という説明のみが掲載された。両書とも記載内容はごく簡潔だが、広範な人々に新たな彗星観に触れる機会を提供したという点はやはり特筆に値する。

5 『仏國曆象編』

地球説による仏教的宇宙観の崩壊を危惧した僧円通は、仏教天文学を擁護すべく『仏國曆象編』（文化七年／一八一〇）序⁽²⁹⁾を執筆した。その反響は諸天文家の無視しないほど大きかつたようで、土御門家の都講を務めた小嶋好謙や伊能忠敬等が反論する書を著している。

本書は彗星について個別に立項していない。しかし、卷之五「証^ス印度測^{コト}曜宿^ヲ高卑^ヲ其伝甚久^{上コトヲ}」に「彗星者外國^ニ名^ニ閻羅王星^ト、此ノ星隨^テ所出^ニ処^ニ必有^ニ災難^也」、卷之一「論^ス聖教所說^ノ變異^ノ之蝕^ヲ」に「楞嚴經^ニ曰^ク、

一洲感^(シテ)惡縁^(ヲ)、則覩^(ルト)日月及ヒ星ノ惡相^(ヲ)、又華嚴經云^(ク)、
一國ノ人感^(ニ)惡縁^(ヲ)、則彼當土^(ル)衆生覩^(ニ)諸ノ一切ノ不祥^(ヲ)、或ハ
見^(シテ)暈・殃・彗・孛^(ヲ)とあり⁽³¹⁾、読者は彗星を不吉な存在
と理解したことだろう。

土佐国高岡郡宇佐村の真覚寺住職井上静照は安政五年
(一八五八) 八月二十一日、日記に次のように記している。

(前略) 人皆彗星と称すれ共、予ハ彗ニあらすと思
へり、先年京都ニ於て天文家の評せる風母^(フウモ)ニ似たる
ものにて、是を仏説にて考るニ、華嚴經ニ「国人感

二惡縁^(ヲ)、則彼當土^(ル)衆生覩^(ニ)諸ノ一切不祥^(ヲ)、或^(ハ)見^(シテ)暈
・殃・彗・孛^(ヲ)とある暈星なるへき乎、多く豊年星
と云触せとも、是多分殃星にして決して瑞星ニハあ
らさる⁽³²⁾、

静照は自分の目撃した彗星が「殃星」ではないかと推
測したのだが、その根拠として引用した『華嚴經』の一
文の返り点が、『仏國曆象編』のそれに一致している。憶
測の域は出ないとはいえ、静照が『仏國曆象編』を参照
した可能性も十分に考えられよう。

西洋近代天文学を初めて体系的に紹介した刊本は、尾
張藩医吉雄俊藏が口述した『理學入式遠西觀象図説』(書名は目
録題より。文政六年(一八二三)刊。以下『遠西觀象図
説』と略記)であつた⁽³³⁾。今日まで伝わる点数は天文書と
しては非常に多く⁽³⁴⁾、當時広く読まれたのは間違いない。
本書も全文を引用すると長くなってしまうため、省略
を交えながら次に掲載する。

尾星

〔漢名彗星、又名孛星〕ハ一種ノ游星ニシテ、

太陽ヲ旋回ス、然レトモ、其行圏甚ダ長円ニシテ、
十二宮ノ行次ニ拋ラズ、太陽ハ其一方端ノ内ニアリ、
其一方ハ遠ク游星天外ニ出ヅ、故ニ、尾星或時ハ來
リテ太陽ニ密邇シ水星行圏ノ内ニ入り、或時ハ去リ
テ游星天ノ外ニ出ヅ、(中略) 奈端^(ネウドン)ノ説ニ、此星
性甚ダ堅実ニシテ油氣ヲ含ムト云ヘリ、故ニ來テ太
陽ニ親シム時、熱氣ニ熾燃セラレ其油熔解シテ焰状
ヲナシ、毎ニ太陽ニ背キ、蒸發シテ尾状ヲナス、(中
略) 其行圏ノ所在、長短、濶狭各同ジカラズ、其コ
レヲ一周スルコト、少者數十年、多キモノ數百年ニ

至ル、然レトモ皆ナ游星天内ニ来ルノ際ニコレヲ見

ルノミナル故、古人コレヲ地上ニ属スル流星ノ一種トシ、或ハコレヲ以テ天災・地変ノ候トセシガ〔和漢ニ此説アリ、西洋モ亦同シ〕、後世ニ至リテコレヲ推歩スルノ術ヲ得テ、予シメ其出没ノ年月及ビ方位等ヲ察シ、今ハコレヲ天象ノ常トスルコトニナレリ、〔中略〕今其詳ナルモノ三星ヲ採リテ第三図二出示ス、其一ハ、紀元一千六百六十一年、即チ吾寛文元年辛丑ニ見ハル、此星一百二十八年ニシテ其行圏ヲ一周ス、〔中略〕法兒札ヘルレイ人名曰、其第二星ナル者ノ行圏ヲ測ルニ、其長ノ全径一百一十二億零一百九十五万一千七百里ナリ、〔後略〕

傍線部によれば、かつて彗星の出現は予測不能だつたため和漢西洋ともこれを「天災・地変ノ候」としたが、

出現が予測可能となつた今では彗星を「天象ノ常」とするという。この主張の裏付けとして本書はニュートンやハレーの説を紹介しており、根拠を明示しなかつた江漢の著作に比して読者への説得力をもつたのではないかと考えられる。本書を通じて西洋近代天文学に親しみ、彗星が凶兆や旱魃等を誘発する火氣・土氣ではないと知つ

た読者もいたことだろう。

無論、本書の出版によつて他の天文書が一掃された訳ではなく、本書出版後に彗星非予兆説を探る『天文図解』や彗星氣説を探る天文書を参照することもあり得た。⁽³⁶⁾蘭学を毛嫌いして本書には見向きもしなかつた読者もいただろうし、本書と他の天文書を比較して、本書の説を却下するケースもあつたかも知れない。

どのような書物が選択され、読まれ、解釈され、そして内面化されたのかという点は、今後個別の事例を集積するより他ない。「はじめに」でお断りしたように、本稿の目的はあくまで彗星観確立に影響を与える書物の提示にあり、実際の受容のプロセスについては全て今後の課題である。

一 中国正史の天官書・天文志

第一章では天文書を検討したが、彗星に言及した書物は決して天文書だけではなかつた。以下では、天文書以外の書物が彗星をどのように描いたのか検討したい。

最初に取り上げるのは、中国の正史である。『史記』以

來、歴代王朝の正史の多くは天文に関する事項を「天官書」「天文志」にまとめ、それぞれの現象について解説した。これらが日本に流入した時期は判然としないが、天平宝字元年（七五七）には、陰陽寮の学生である天文生は『史記』天官書・『漢書』天文志・『晋書』天文志を学ばなくてはならないと定められている。⁽³⁷⁾

近世に入ると訓点を施した和刻本の正史が出版され、盛んに読まれた。中でも『史記』の本文と代表的な注釈書（『史記集解』『史記索隱』『史記正義』）を収録して増補した『史記評林』は幾度か再刊された。⁽³⁸⁾ 安藤昌益が『曆大意』上・『曆之太意』中位下を編むにあたつて『史記評林』天官書を参照したことが知られており、『史記評林』が近世の人々の彗星觀に影響を与えたのは確実である。昌益も読んだ『史記評林』は彗星をどのように説明しているのだろうか。

（歳星の位置が狂い—引用者注）進^テ而東南^{スル}ト二月、生^ス彗星^ヲ〔正義曰、天彗者一名掃星、本類^レ星^ニ、末類^ス彗^シ、小者^ハ數寸^ノ長、長^{キハ}或竟^レ天、而^{シテ}体無^レ光、仮^ル日之光^ヲ、故夕^ニ見則東^ニ指^ス、晨^ニ見則西^ニ指^ス、如^テ日南北^ス、皆隨^テ日光^ニ而指^ス、光芒^ヲ所及為^ス災變^ヲ、見

則兵起^ル、除^レ旧^ヲ布^レ新^ヲ、彗所^レ指^之凶弱^シ也^{）、長^ケ二丈、類^ス彗星^ニ、⁽⁴⁰⁾}

『史記』の本文は、歳星（木星）の位置に異常があると彗星を生じると説く。『史記』成立当時の観測技術では、このように考えても矛盾は見出されなかつたのだろう。

先に検討した西川如見の『天文義論』では「漢書等二十八鎮星・歳星・熒惑等変シテ彗・孛ノ類ト成シヨシ見ヘタリ」と言及及されているが、『漢書』天文志の説は『史記』天官書の説を踏襲したものである。⁽⁴¹⁾

これに続く「正義曰」以下の割注では、彗星出現後に発生する事態が具体的に語られる。すなわち、彗星はその光芒の及んだ所に災変を引き起こし、出現すると兵乱が勃発し、古きを除いて新しきを布くという。「除旧布新」は現状を肯定的にみるか否定的にみるかによつて凶事とも吉事とも解釈が可能だが、前後で凶事を列挙するこの文脈では、読者が吉事と解釈するとは考えにくい。『史記評林』天官書は彗星凶兆説を提示したと結論付けてよいだろう。

この他の中国正史の天文志もほぼ同内容で、『漢書』天文志・『後漢書』天文志・『晋書』天文志⁽⁴⁴⁾はいずれも

「除旧布新」の語を引用して彗星を凶兆視している。彗星に関する情報を中国正史の天官書・天文志に求めた場合、読者が得るのはこうした彗星凶兆説であつた。

三 辞典・事典類

未知の事象についてまずは辞典や事典類で調べるのは今も昔も変わらないようで、彗星出現時に辞典・事典類を参照した近世人の事例が幾例か存在する。本章では、近世の辞典・事典類が彗星をどのように説明したのか検討する。

1 節用集

節用集は漢字を書くために用いられた書物であるが、近世になると、簡単な解説を付したものや出典を記したものも出版された。その中には、彗星に関する情報が含まれているものがある。

貞享五年（一六八八）に刊行された『鼈頭節用集大全』（目録題）は「は」の項で彗星を取り上げ、頭書に次の

解説を付した。

彗星^①象箒のごとし、故に掃帚星とも書り、又天下に災のあらんとき出る、先兆の星成、ゆへに櫻槍とも云へり、^②一説に海中に鯨の病して死すれば鯨の目精彗星となるとも、

前半の①はいずれかの中国の史書、②の鯨が死ぬと彗星が出現するという説は『淮南子』天文訓に由来する⁽⁴⁶⁾。西川如見の『怪異弁断』によれば「目精」の語は『淮南子』の注にあるというが、『淮南子』の注釈書類にその語を見出すことはできなかつた。⁽⁴⁸⁾

宝永元年（一七〇四）元版・天保四年（一八三三）増補・文久三年（一八六三）補刻の『江戸大節用海内藏』の場合、「彗星」の見出しの下に割注で「古ハ慧^{ケイ}の音也、音遂^{スイ}とす、芒光長し、中天の火氣也」、その隣の「孛星」の割注には「古ハ勃^{ボツ}の音也、彗の類ニテ其光四方に出、芒短し」と記されている。⁽⁴⁹⁾こちらは『天經或問』由來の説を採用しているが、オリジナルの宝永元年版では記載内容が異なつていた可能性もある。⁽⁵⁰⁾

享保二年（一七一七）に刊行された『和漢音釈書言字考節用集』（外題「増補合類大節用集」）は出典を明記し

て引用する。

彗星 「^一ハ音遂、或^二ハ音恵、史記注 体無^三光仮ル日之光」、

故夕^二見シ則^ハ東^二指^シ、晨^二見シ則^ハ西^二指^ス、光芒^一所及

為^ニ災變^ヲ」

孛星 「又云蓬星、左伝注 光芒短^{シテ}其光四^ニ出蓬々勃々、晋天文志 出^ル則有^ニ亂臣」⁽⁵¹⁾」

々、晋天文志 出^ル則有^ニ亂臣」⁽⁵¹⁾」

出典として掲げられたのは『史記注』（正確には『史記正義』）・『左伝注』・『晋書』。天文志の三書で、いずれも彗星と孛星を凶兆視する中国の史書及びその注釈書である。水戸藩の国学者西野宣明は安政五年（一八五八）八月に本書を引用して「可慎戒也」と記しており、本書が近世人の彗星観形成に一役買つたことが確認できる。

彗

○彗星ハ俗にはハきぼしといふ、妖星也、^①色あをきハ王候死す、あかきハ強國おごる、しろきハ兵乱をこる、天下にわさハひ有ときあらハるゝ星なり、かたち帚のことし、

孛

○孛星ハ妖星也、^②此星いづるときハ旧をのぞきて新にあらため、又は火災にたゝるの瑞あり、俗にこれを御光ほしと云、⁽⁵⁵⁾

①の色による彗星の分類は『孝經鉤命決』宋均注の説で、『後漢書』注（劉昭の『集注後漢』）や後述する『太平記鈔』に引用されている。⁽⁵⁶⁾②が『左伝』由来の「除旧布新」説であることはいうまでもないだろう。①の後で彗星は災いの兆、②の後で孛星は火災の兆とも説いており、本書は彗星凶兆説の立場に立つものである。

『頭書増補訓蒙図彙』をさらに増補した寛政元年（一七八九）の『訓蒙図彙大成』の解説もほぼ同文で、引き続き彗星凶兆説を説いている。

『訓蒙図彙』は絵入りの事典である。寛文六年（一六六六）に刊行されたオリジナルのものは彗・孛を並べて「彗⁽⁵⁴⁾はゝきぼし 彗星也」「孛⁽⁵⁴⁾はゝきぼし 孜星也」と記すのみだが、元禄八年（一六九五）の『頭書増補訓蒙図彙』では、頭書に次のような解説が追加された。

3 『和漢三才図会』

大坂の医師寺島良安によつて編まれた近世日本の百科事典『和漢三才図会⁽⁵⁸⁾』（正徳五年（一七一五）跋）には『天經或問』からの引用がみられることから、禁書令下の『天經或問』受容を示す事例として注目を集めてきた。⁽⁵⁹⁾ 果たして『和漢三才図会』は彗星について『天經或問』の説を探るのか、中国の史書の説を探るのか、あるいはいずれとも異なる説を探るのか。

①左伝云 天之有レ彗以除レ穢ヲ也、有ニ彗・孛・長
之三種・占有ニ異同、

彗星ハ其光芒長ク參參トシテ如ニ払埽ノ「多ハ為ニ除レ旧ヲ布
ク新ヲ火災之表」、

孛星ハ其光芒短ク光四モニ出、蓬蓬勃勃タリ「同前」占、
長星ハ其光芒有ニ一直ニ指シ、或ハ竟リ天ニ、或ハ十丈、
三丈、二丈、「多主ニ兵革ヲ」、

緯書ニ云、彗星色蒼者王候破ル、赤者賊起ル、

③△按彗星凡晨ニ見ヨレハ東方ニ則芒西ニ指ス、夕ニ見ニ西
方ニ則芒東ニ指、而從ナリ于日ニ也、日久則勢尽、力
衰ル故、彗孛無シ百日不レ滅者、凡彗見ノテ必主

ニル大風・大旱・地震・災疾^ヲ矣、⁽⁴⁾長星最為凶、
孛星特ニ重^ミ、多ハ兵起ル、蓋シ此非ニ本星變スル者^ニ、
又非ニ出来者^ニ、而近レ地ニ處人ノ目ニ止見ニル光芒
ヲ而已、其芒以レ付ニクト^ヲ於何ノ星ニ、占ニ其變^ヲ也、
本星ニハ無レ事故中華ニ若キ^ノ彗見ル時本朝不レ然ラ、
但示ニ其土地ノ不祥^ヲ也、猶眼病ノ人見^テ燈^ヲ以為スルカ
有^ト光芒^也、⁽⁶⁰⁾（後略）

この文章はその内容から、漢籍の説を紹介した①・②と、良安が自身の見解を述べた③以降に大別できる。

漢籍の引用は、①の部分が『左伝』、②の部分が『緯書⁽⁶¹⁾』からとされる。しかし①については「齊有ニ彗星」、（中略）以除レ穢ヲ也」（昭公二十六年）を除いて『左伝』に該当箇所が見当たらず、管見の限り、『漢書』文類注にしか見出すことができなかつた。⁽⁶²⁾ ②は『孝經鉤命決』宋均注の説を何らかの書物から引用したものである。

統いて良安は「接するに」と自説を展開する。とはい
え③はやはり引用で、これはどうやら『天經或問』から
の引用とそのまとめらしい。⁽⁶³⁾ ④の部分も何らかの書物に
由来する可能性が高いが、確実な典拠はわからない。引
用ではなく、①の部分をまとめただけなのかもしねり。

一方、「本星」ではないという⑤の見解は、『天經或問』

の彗星氣説を念頭に置いたものだろうか。いずれにせよ、

「示^(ス)其土地ノ不祥」^(フ) という言葉から、『和漢三才図会』は彗星を凶兆視していると結論付けてよいだろう。

本書の説は越後国三島郡片貝村の庄屋太刀川喜右衛門と水戸藩の国学者西野宣明が書名を挙げて引用しているほか、京都で質屋を営んだ高木在中も恐らく本書を参照している⁽⁶⁴⁾。一〇五巻八一冊から成る本書を一般民衆が所持することは難しかつただろうが、武士や中上層の民衆の場合、彗星出現時に本書を参照したケースは多かつたのではないかと思われる。

以上の検討から、辞典・事典類の大半は中国の史書を中心とする漢籍の説に基づいて、彗星は凶兆であると読者に説明していたことが明らかとなつた。中国の史書が手に取られることがなくとも、その説は辞典・事典類を通じて着実に近世日本の読者の元へと到達していたのである。

近世日本の民衆が日常生活の中で参照した書物として、辞典・事典類に加えて『東方朔秘伝置文』と「大雑書」を取り上げる必要があるだろう。いずれも民衆向けの暦占書で、前者は作物の豊凶や天災、後者は日取りや方位に主眼が置かれている。両書の受容と利用の実態を精力的に発掘している小池淳一氏によれば、これら暦占書の内容は時に取捨選択され、民俗化していつたという⁽⁶⁵⁾。彗星に関する知識を両書から得て、それが民俗化するという事態も十分に想定できよう。

1 「東方朔秘伝置文」

『東方朔秘伝置文』（貞享三年（一六八六）刊）には「星を候て吉凶知る事」という章があり、その中で彗星も言及されている。

彗星ハ天下太平の世にハかくれてあらハれず、無道の世にハ此星すなハち出て、わざハひをしめすとなり、あるひ八月のかたハらにあらわるゝハ大にあし

く、星の色白きハ田畠五穀不作にしてあしく、黄なるは洪水ありて、万物をそこなひやぶる、色あかきハ大にあしく、五穀高直にして人民家をはなれ、財宝をうしなふ、南に出るを熒惑星と名づく、天下日旱と知るへし、大にあしく、北に出るを大謀星といふ、此ほしあらば大に悪しと知べし、西に出るを金星となづく、大に国中に盜賊をくる、東に出るを軍星と名づく、大に國にたり凶し、中央のそらにミゆるハ大元星となづく、洪水・旱魃・火災・疫癆・蝗虫・飢饉、さまくあしき事ミゆる、昼ミゆるハ災弥はげし、⁽⁶⁶⁾

ここに示された彗星觀は、仮名草子『安倍晴明記』(外題『安倍晴明物語』、寛文二年(一六六二)刊)天文卷の説をほぼ忠実に踏襲したものである。⁽⁶⁷⁾しかし読者はそれを知る由もなく、あくまでこれを『東方朔秘伝置文』の説として読んだことだろう。

ここでは何より冒頭の一文に注目したい。彗星は天下太平の世には現れず、無道の世に出現して災いを示すというのである。この彗星觀に従えば、彗星の出現は世が無道であることの証に他ならない。時の為政者が太平の

世をもたらしていないから彗星が出現したとの解釈も成り立つわけで、為政者への批判意識を引き起こす可能性を秘めた彗星觀といえよう。

後はひたすら凶事のオンパレードといった様相で、彗星の色や出現する位置によつて対応する災いを列挙する⁽⁶⁸⁾。この箇所も『安倍晴明記』に概ね従つているのだが、興味深いことに、「月のかたハらにあらハれて、(中略)兵乱等のわざハひを生ず」→「月のかたハらにあらわるゝハ大にあしく」、「東に出るを軍星と名づく、兵乱おこりて、久しく絶ず」→「東に出るを軍星と名づく、大に國にたり凶し」と「兵乱」の二字が別の表現に置き換えられている。出版に際して兵乱の語を忌避したか、もはや兵乱が現実に生じるとは感じられなかつたために作者が書き換えたものと考えられる。

彗星を前にして本書を参照した読者は、無道故に出現したと理解して体制への批判意識を強めたのか、ひたすら凶事におびえたのか、それとも荒唐無稽な説としてこれを退けたのか。それは人それぞれであつただろう。体制への批判意識が芽生えた人などごく僅か、あるいは皆無だつたかもしれない。しかしそのような読み方も決し

て不可能ではなく、本書が人々の内面に潜む体制への不満を増幅させることもあり得たことを再度強調しておきたい。

2 『永曆大雜天文大成』

天候に関心を寄せる『東方朔秘伝置文』が彗星に言及したのに対し、日取りの占いを中心とする「大雜書」は当初彗星に触れていなかった。しかし様々な版が競い合う中で次第に情報量が増え、敦賀屋九兵衛から明和五年（一七六八）に出版された『永曆大雜天文大成』に至つて頭書で説明されるようになつた。⁽⁶⁹⁾ その内容は次の通りである（引用は安永二年（一七七三）の改版本より）。

十八 彗星

（図略）

① 彗星ハ左伝に天のけがれをのぞくとあり、天のはゝき也、おほく古きを改めあたらしくするなれば、火事を主る、②又ハ大風・ひでり・地震をつかさどる也、^③しかしそはあらたに出来る物にあらず、ほ

廿六 彗星

（図略）

左伝に天のけがれをのぞくとありて、天のはゝきなり、多くふるきを改め新しくするなれば、火事を主る也、しかしこれハ新に出来るものならず、星の地

しの地に近き処の人の目にひかりを見るのみ、是によりて唐にミゆる時日本にミヘざる也。⁽⁷⁰⁾

この内容は①部分が『和漢三才図会』の①、②部分が同書の③、③部分が同書の⑤に概ね対応しており、『和漢三才図会』を参照して執筆されたものと考えられる。本書の読者は、彗星凶兆説以外の説を読み取ることはできなかつただろう。

3 『新撰 大全 永曆雜書天文大成綱目』

『永曆大雜天文大成』に統いて彗星を取り上げたのは、同じく敦賀屋九兵衛から出版された『新撰 大全 永曆雜書天文大成綱目』（文化六年（一八〇九）刊）である。頭書に記された点は『永曆大雜天文大成』と同様だが、その内容には変化が現れた。

に近き処の人の目にひかりを見るのみ、^①元来地氣

の乾燥の氣を以なり、日の光をうけてなる故、夕ハ

東へさし、曉ハ西にさす、乾燥の氣故火災を恐れ、又災害の甚しきものとして恐る、^②しかし治世にて何の事なきを覚ふ事も有、全体星よりハひくきもの故、唐に有て本朝に見へず、東国に有て西国に見へ分ざる事も有とぞ。⁽⁷²⁾

『永曆大雜天文大成』から新たに加わった情報は傍線部①と②である。①では『天經或問』由來の彗星氣説を取り上げ、乾燥の氣故彗星は火災を引き起こすと説明する。この点は「多くふるきを改て新しくするなれば、火事を主る也」の一節と矛盾するものではなく、むしろそれを補強する役割を果たしている。

一方、治世に出現する彗星は必ずしも災いを引き起こさないと説く②の方は、彗星凶兆説に修正を迫るものである。凶兆説から距離を置いた一文が挿入された理由は定かではないが、作者の実感に即していなければ、わざわざ記することはなかつただろう。ともあれ作者は相反する両論を併記するに留め、判断は読者にゆだねている。

4 ^{〔天保 新編〕}永代大雜書万曆大成

『天保
新編』永代大雜書万曆大成（天保十三年（一八四二）刊）も敦賀屋九兵衛からの出版で、九兵衛は本書をもつて「大雜書」の最上とした。⁽⁷³⁾ 中身はその言葉の通り充美し、彗星に関する記載も全面的に書き改められている。少々長くなつてしまふが、次に全文を引用する（引用は安政三年（一八五六年）再刻本より）。

廿八 ^{〔マニ 以同様〕} 慧星の図説

（図略）

慧星晨に東方にあらかるゝときハ芒西にさす、夕辺に西にあらかるゝ時ハ芒東にさすなり、是すなハ光芒ハ日の光をうけてうつる影なり、前にもいふごとく、月・星とも日の光を受て明かなる物なり、然れども余の星ハ白きかけなし、此星のミ白き影をなすハ何故ぞといふに、月・星ハ鏡のごとくなれば、日の光をうけて明かなるのみなり、慧星は水晶のごとく透明ゆゑ、日の光是を照せば裏へ徹りて、白き影等のごとくあらかるゝもの也、芒に長短あるハ日を去事の遠近正斜による也、

○一説に、衆星皆円なり、只慧星ばかりハ扁円目鑑の玉のごとし、ゆゑに日の光を右より受れば、白影左の方へさし、又左より受れば、白影右の方へさす、いづれも芒細く長し、もし正面より日光を受れば、芒四方へ出て孛星となると謂り、此星天理の巡によりて、顯るゝ年と顯ハれぬ年とあり、しかるを天文学うとき徒ハ、慧星出れば兵乱起るといふ者ハ大に非なり、今太平の平也御代久しく続けども、此星數度あらハれ、天下ますく昇平にして、万民徳沢に浴す、慧星百千度出るとも何の恐かあらん、俗を惑す族の詞信すべからず、⁽⁷⁴⁾

前二書とは違い、本書はもはや『左伝』に言及しない。彗星は「天理の巡によりて」出現する星とされ、その帰結として、彗星を凶事の兆とする説は「俗を惑す族の詞」として退けられている。『天經或問』の彗星氣説も放棄されているため、火災を引き起こすという説明がなされることもない。彗星は地上の出来事とは全く無関係な一天文現象に過ぎないと立場である。

この新しい彗星觀は、西洋の近代天文学に由来するものと考えてまず間違いないだろう。しかし、具体的に依

拠した書物はこれまでのところ判明していない。彗星を水晶のように透明な物体とする説・彗星のみが橢円のため芒が生じるという説は司馬江漢の著作や『遠西觀象図説』にはみられず、本書が『遠西觀象図説』で紹介されたニュートンの説に言及することもないので、何か別の書物を参照したと考えた方がよさそうである。その発掘は今後の課題としたい。

辞典・事典類と違い、筆者はこれまでに、彗星出現時に『東方朔秘伝置文』や『大雑書』を参考した記録に遭遇していない。しかし、これを以て『東方朔秘伝置文』・『大雑書』が辞典・事典類のようになに参考されることはない。しかし、これを以て『東方朔秘伝置文』・『大雑書』の讀者層のズレにかつたと結論付けるのは早計だろう。むしろ、日記を残す層と『東方朔秘伝置文』・『大雑書』の讀者層のズレにその理由を見出すべきかと思われる。『大雑書』を通じて初めて西洋近代天文学の彗星觀に触れ、彗星凶兆説から転じた近世人もいたことだろう。

五 軍書

1 『太平記』とその注釈書

『平家物語』や『太平記』といった前代のものから近世に執筆された通俗的なものまで、近世には数多くの軍書が出版された。若尾政希氏・横田冬彦氏は、これらの軍書が近世の人々の「政治常識」や歴史意識の形成に大きな役割を果たしたことを明らかにしている。⁽⁷⁵⁾ 近世の人々にとって軍書は単なる娯楽の種ではなく、過去の、ひいては自分の生きる世界を理解するための重要なツールでもあった。

この軍書というジャンルの書物の特徴の一つに、彗星が頻出することが挙げられる。それも大抵の場合は「彗星出現の事」といった標題で独立した章が割かれており、物語の進行上、彗星は重要な役割を果たしていた。読者は彗星について調べるつもりがなくとも、物語を読み進めるうちに彗星についての知識を得ることになったわけである。本章では『太平記』とその注釈書、そして近世に執筆された軍書の事例として『続太平記狸首編』と『前太平記』を取り上げ、軍書の中で彗星がどのように描かれているのか検討したい。

『太平記』は巻三十八「彗星・客星ノ事付湖水乾事」で康安二年（貞治元年、一三六一）二月の彗星出現時の様子を描いている。全文を掲載すると長くなってしまうので、適宜省略しながら次に引用する。

康安二年二月二、都ニハ彗星・客星同時ニ出タリトテ、天文ノ博士共内裏ヘ召レテ、吉凶ヲ占ヒ申ケリ、客星ハ（中略）今ニ至ルマデ十四箇度、其ノ内ニ一度ハ祥瑞ニテ、十二度ハ大凶也、彗星ハ（中略）今ニ至迄八十六箇度、一度モ未夕災難ナラズト云事ナシ、尤天下ノ御慎ニテ候ベシト、博士一同ニ勘申ケレバ、諸臣皆色ヲ失テ、サレハヨ、此ノ乱世ノ上ニハ、ゲニモ世界國土万金輪際ノ底ヘ落入力、不レ然ハ異國ノ蒙古寄來テ、日本国ヲ打取カニテコソアラメ、サル事有マジキ世共不レ覺ト、面々申合レケリ、（中略）天地ノ變ハ既ニ如レ此ノ、人事ノ變又サコソアランズラメト思処ニ、國々ヨリ早馬ヲ打テ、宮方蜂起シリト、告ル事曾テ休時ナシ。⁽⁷⁶⁾

康安二年二月に彗星が出現したことは他の史料から確

認できるものの⁽⁷⁷⁾、それ以上については裏付けが取れてい
ない。したがつてこの描写には虚構が含まれている可能

性が高いが、問題としたいのはその実否ではなく、彗星
がどのような存在として描かれているか、そして近世の
読者がそれをどのように理解し得るかという点である。

ここでは彗星は天文博士の口を通して凶兆であると説

明され、それを聞いた公家達は、世界の底が抜けて金輪
際まで落下する、あるいは蒙古が襲来するといった、あ
らん限りの凶事を想起する。しかし実際に発生したのは
そうした事態ではなく、諸国での南朝方の蜂起であつた。

この彗星が南朝方蜂起の予兆だつたとは、本章にも次
の章にも記されていない。したがつて読者が読み取るよ
り他ないが、物語の流れは明快であり、この彗星が新た
な戦の前兆として描かれていると容易に理解できただろ
う。

「彗星→戦」という図式は『保元物語』⁽⁷⁸⁾『源平盛衰記

』⁽⁷⁹⁾で既にみられ、近世に入つてからも『難波戦記』⁽⁸⁰⁾『続

太平記續首編』⁽⁸¹⁾『前太平記』⁽⁸²⁾に受け継がれてゆく。中には『前太平記』のように、彗星の出現が史料上確認でき

ないにもかかわらず、兵乱の前に彗星を登場させるもの

もある。

こうした描き方に対し、近世人の「政治常識」形成に
寄与したとされる『太平記』の注釈書『太平記評判秘伝
理尽鈔』(正保二年(一六四五)刊、写本はそれ以前から
流通。以下『理尽鈔』と略記)はどのような論評を加え
ているのだろうか。

評云、往昔ヨリ已來如キ是ノ事度タアリシ、異朝記
文ヲ見ルニ亦多シ、⁽¹⁾然レ共災アル事モ有リ、又災ノ
出来又事モ有リ、然レ共災出来又事ハ少ク、災アル
ハ多カリシトニヤ、⁽²⁾但災ナキ時現ジタリシヲバ不
レ記セニヤ、不審ト也、⁽³⁾然レハ不定ナルカト云々、又
評云、國ノ興亡ヲ見ルニハ、彗星ニ不レ依ラ、定リタ
ル見所アリト也、ソレト者、ニハ逆威ヲ以テ國ヲ
治ルアリ⁽⁸³⁾、(後略)

『理尽鈔』はまず①で、彗星出現後に災いが生じたこ
とも生じなかつたこともあるが、生じたという記録の方
が多いことを認める。しかし、凶事が生じない場合はそ
もそも彗星出現の記録 자체が残されなかつた可能性を指
摘し(②)、したがつて彗星は災いの前兆とはいえないの
ではないかと結論付けた(③)。「妖靈星」を論じた別の

箇所でも「凡繼体天皇御宇治マルコト六年ニ当テ、妖靈星殿上ノ小庭ニ下レリ、都テ別凶ナシ、又其ノ後モ、度々或ハ客星・慧星出来タレトモ、凶有ル時モ有リ、吉事有ル時モ有リ、無レ吉無レ凶時モ有リ、又惡星不^レ出⁽⁸⁴⁾、天下ノ大凶事有リシ事多カリケリ、是ヲ以テ不定也」と異星と凶事の因果関係を疑問視しており、『理尽鈔』が彗星凶兆説に否定的なのは明らかである。

一方、『太平記鈔』（慶長十五年（一六一〇）刊）は彗星を次のように説明する。

一、彗星 爾雅曰、彗星為櫟槍、注亦謂之孛星、言其形孛々似掃彗、或云掃星^{已上}、杜預曰、彗所以除旧布新也、音似義反、正義曰、彗徐醉反、又先倒反、妖星光芒偏指如彗者也、春秋鉤命決宋均注云、彗五彗也、色蒼則王侯破天子苦兵、赤則賊起疆国恣、黃則女害色權奪后妃、白則將軍逆三年兵大作、黑則水精賊江河決、賊處廻起^{已上}、史記天官書云、正義曰、小者數寸長、長或竟天而體無光、假日之光故、夕見則東指、晨見則西指、芒所及為災變、見則兵起⁽⁸⁵⁾、

こちらは独自の説を展開した『理尽鈔』とは違い、全て漢籍からの引用である。引用は漢文のままで、誰もが

気軽に読めたとは言いがたい。しかし本文と注釈をセットにした『太平記大全』（万治二年（一六五九）刊）・『太平記綱目』（寛文十二年（一六七二）後序）に収録された際には訓点が施され、読者の便が図られた。

引書は孫引きの部分も含まれているため少々わかりにくいが、中国最古の辞典『爾雅』とその注釈書、『左伝』とその注釈書⁽⁸⁶⁾、『孝經鉤命決』、そして『史記正義』の説が紹介されている。「春秋鉤命決」は「孝經鉤命決」が正しく、『太平記鈔』の作者が誤ったか、引用時に参照した書物が既に誤っていたのだろう。

ここに示された諸説のうち、『左伝』の「除旧布新」は現状を肯定的に評価するか否定的に評価するかによって、プラス・マイナスいずれの解釈も可能である。だが、その後の『孝經鉤命決』と『史記正義』は彗星を兵乱等の兆と断言しており、読者の多くは本書から彗星凶兆説を読み取つたとみてよからう。

『理尽鈔』と『太平記鈔』はともに『太平記大全』に収録されたため、『太平記大全』の読者は、彗星を凶兆視しない『理尽鈔』・彗星を凶兆とする漢籍の説を紹介する『太平記鈔』・そして彗星を戦の前兆として描く『太平記』

本文を同時に目にすることになった。安藤昌益もそうした読者の一人である。⁽⁸⁷⁾ 残念ながらこの三つの彗星觀を比較論評した読者の事例に未だ接していないが、いずれかの彗星觀に納得する読者もいれば、いずれも却下する読者もいたであろうし、中にはいずれとも矛盾しない新たな解釈を生み出す読者も存在したかも知れない。

2 「続太平記狸首編」と「前太平記」

近世に成立した『続太平記狸首編』（貞享三年（一六八六）刊）と『前太平記』（刊年不明）では、彗星が災いの兆として描かれるのみならず、攘災の方法も説明されている。その方法とはいかなるものだったのか。

『続太平記狸首編』卷之九、「彗星客星出現事^井都鄙連年天災事」⁽⁸⁸⁾には次のような一節がある。

応永九年正月元ソ方ヨリ、天下ニハ彗星・客星相雙テ同時ニ出タリトテ、天文ノ博士密々ニ吉凶ヲ占ヒ、陰陽道家々ノ勘文ヲ進覧ス、（中略）何レモ世ノ不吉ニシテ、一度モ凶事ナラズト云コトナシ、大君若ハ禦穢^ヲ滅^ル禍^ヲ御^シ政^ニ非^スンバ、恐クハ重キ國家

ノ大事、天下一同ノ可レ為累ト、諸道合^セ符節^ヲ申シケ
レ共、今ノ相國ハ究テ御^シ情コワ^クシク、（後略）

（足利義満）

傍線部によれば、「大君」が穢れを祓い、禍を滅する政を執り行わなければ、国家の大事が生じて天下一同の累となるという。これと同様の認識は別の箇所でも示され、卷第十七「彗星出現事」に「夫彗星ノ出ル事ハ世ニ二数回ニシテ、治乱孰モ一定ナラズト雖共、前代ニハミナ修レ^メ徳ヲテ、天災ヲ除ル、政事坐シカバ、夭ハ自然不^{シテ}克^ム人ノ徳ニ世ハ異ナル禍モ無リツル也、（中略）仁政ト恩敷事ハ曾^テ無リシカバ、自^レ此後、又何ナル不慮ノ事力到来シ、（後略）」とある。この文章の言葉を用いるなら、彗星が出現した場合、「不慮ノ事」を発生させないために「仁政」を施すことが為政者の責務ということになろう。

また、『前太平記』では、「彗星毎夜顯て、其光月よりも尚明なり、（中略）諸卿重て僉議あつて、天災地妖既に顯れ、今又諸人奇物を愛す、此の三災を消れんに年号改元有ベシとて、承平をやめられて天慶にぞ移されける」と改元による消災が図られた。⁽⁸⁸⁾ 仁政と並び、改元も彗星のもたらす災いを取り除く有効な手段と位置付けられている。

以上、近世に成立した軍書には、彗星出現時に仁政や改元を施してその災いを攘うという件が登場するが、これは作者の想像力によつて生み出されたものではなかつた。十二世紀初めから十四世紀にかけて、朝廷と鎌倉幕府は彗星が出現すると徳政の一環として新制を發布し、時に改元も実施して天変攘災を図つてゐるのである。⁽⁸⁹⁾著名な永仁の徳政令（永仁五年（一二九七））も彗星の出現を契機として発令されたものであつた。⁽⁹⁰⁾

『続太平記』や『前太平記』の読者は、こうした將軍・天皇による攘災はあくまで過去の別世界の物語として理解したかもしれない。しかし、自分の生きる時代の將軍・天皇の姿を重ね合わせ、彗星の出現は為政者の政治に問題があるからだと理解した読者の存在も、十分に想定可能であろう。⁽⁹¹⁾

六 政道書

政道書については未調査だが、一例だけ紹介しておきたい。

徳川家康の重臣本多佐渡守正信に仮託され、領主層を

中心に受容された『本佐録』（十七世紀半ば成立か）に、次のような一節がある。

国乱天下の乱れんとする時は、或はぼうき星、或は大地震、大火事、大洪水、飢饉、或は好色、あるいはよしみ深き能臣下、多く死する事あらば、天子の政悪敷によつて、人民のくるしみ天に通じ、天下國家を亡す事を、天道より告ると知べし、時をうつさず、天子心を改め、大臣奉行の行ひ是非を糾し、正路なる横目を、国々へ遣し、万民安穏の政を施すべし、政を改る時は、災は程なく消るものなり。⁽⁹²⁾（傍点引用者）

「天子」の政が正しくない場合は人民の苦しみが天に通じ、このままでは国が滅びると天道がぼうき星や大地震等で警告するので、「天子」は万民安穏の政へと正さねばならない。このように述べる本書は、『続太平記』の彗星觀に従えば、彗星は「天子」の悪政の証に他ならなかつた。諸説の中から本書の説を選んだ場合、読者は彗星を目にする度に為政者への批判を強めたことだらう。

おわりに

本稿は読者の立場に立つて、近世人に彗星に関する情報を探した書物及び人々がそこから獲得する可能性のあつた彗星観を検討した。いまだ検討は不十分であるが、

本稿により、彗星に関する知識は天文書だけでなく中国の正史や軍書、辞典・事典類や「大雑書」等、様々な書物からも獲得される可能性があつたこと、西洋近代天文学の説も彗星非予兆説に含めれば、近世の書物は彗星非予兆説・彗星凶兆説・彗星気説の三説を説いていたことが明らかとなつた。

最後に今後の課題を挙げて、本稿を締めくくることにしたい。

まずは、未検討史料の調査がある。本稿では検討できなかつた政道書が当面検討すべき大きな塊だろう。また、伝本数は多くないが、国学系の天文書も要検討である。

次に、版による違いの確認を行わなくてはならない。

特に、改版本・再刻本しか検討できなかつた『永曆大雑天文大成』と『新選永代大雑書万曆大成』は初版本と照らし合わせ、場合によつては情報を修正する必要がある。

第三の課題は、具体的な読者の記録の発掘である。これが最も大変な作業だが、地道に史料を読み解く他ない。本稿の成果に基づいて以前に検討した史料を再検討すれば、新たな知見が得られる可能性もあるだろう。

【注】

- (1) 拙稿「書籍とフォーケロア—近世の人々の彗星観をめぐつて—」(『一橋論叢』一三四・四、二〇〇五年)、拙稿「徳川将軍と天変—家綱・吉宗期を中心にして」(『歴史評論』六六九、二〇〇六年)、拙稿「近世前期の民衆と彗星—『桂井素庵筆記』を題材に—」(『日本歴史』七〇九、二〇〇七年)。

- (2) 代表的な研究として、横田冬彦「近世村落社会における『知』の問題」(『ヒストリア』一五九、一九九八年)、若尾政希「書物の思想史」研究序説—近世の一上層農民の思想形成と書物—(『一橋論叢』一三四・四、二〇〇五年)を挙げておく。
- (3) 「作者の立場」と「読者の立場」については、横田冬彦「徒然草」は江戸文学か?—書物史における読者の立場—(『歴史評論』六〇五、二〇〇〇年)を参照。

(4) なお、本稿では書名はいずれも内題を採用し、内題が存在しない場合は書名採用箇所を明記した。所蔵館によつては内題以外の書名を採用しているところもあるが、本稿では内題で統一してある。内題と外題が大きく異なるものについては外題も注記した。

(5) 小林准士「近世における知の配分構造——元禄・享保期における書肆と儒者——」(『日本史研究』四三九、一九九九年)、藤實久美子『近世書籍文化論——史料論的アプローチ——』(吉川弘文館、一〇〇六年)。

(6) 両書とも科学史では早くから注目され、廣瀬秀雄・中山茂・大塚敬節校注『近世科学思想』下(日本思想大系六三、岩波書店、一九七二年)に収録されている(『天文瓊続』は抄録)。

(7) 渡辺敏夫『近世日本天文学史』上(恒星社厚生閣、一九八六年)七六〇~七七〇頁。

(8) 同前、七六〇頁。

(9) 『国書総目録』補訂版に収録された三三点、その他に二七点、計六〇点の存在が知られている(いずれも国文学

研究資料館のデータベース「日本古典籍総合目録」<http://basel.nii.ac.jp/~tkotten/about.html> (一〇〇七年

一月三〇日現在)による)。この数字は、「日本古典籍総合目録」で分類を「天文」としてヒットした一五四五点中、上から四番目にあたる。以下、書物の点数を記したもののは同様にして得た合計点数である。

(10) 国立国会図書館所蔵本(元禄二年久保田権右衛門刊、請求記号二一〇・一五九)より引用。

(11) 官幣大社稻荷神社編『荷田全集』第七巻(吉川弘文館、一九三一年)六二六頁。

(12) 実際には、この十九年後の宝暦十三年(一七六三)九月一日、暦注には記されていない日蝕が生じるという事態が発生する。

(13) 若尾政希「天変地異の思想——昌益の天譜論と西川如見——」(同『安藤昌益からみえる日本近世』東京大学出版会、二〇〇四年。初出一九九〇年)。

(14) 渡辺前掲注7書、七八頁。

(15) (14) 「日本古典籍総合目録」に五七点掲載。分類「天文」の中では上から六番目になる。

(16) 国立公文書館所蔵本(宝永三年鳴井茂兵衛刊、請求番号一九四・六三)より引用。

(17) これはあくまで彗に関する部分についてであつて、『初

学天文指南鈔』全体が『天經或問』の引き写しという訳ではない。

(18) 中山茂『日本の天文学』（朝日文庫、二〇〇〇年。初出

一九七二年）七三～四頁、吉田忠「『天經或問』の受容」

（『科学史研究』一五六、一九八五年）、渡辺前掲注7書

第三章、久米裕子「日本における『天經或問』の受容（1）

—その書誌学的考察—」（『京都産業大学日本文化研究所

紀要』九、二〇〇三年）。

(19) 『天文義論』が問答形式で簡潔に解説するのに対し、『怪異弁断』は和漢の旧例を挙げて考察を加える。

(20) なお、『天文義論』は計一九点、『怪異弁断』は二九点が掲載されている。

(21) 国立公文書館所蔵写本（『両儀集説』の付録。請求番号一九四・五五）より引用。

(22) 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本（正徳五年河内屋太助刊、配架番号八・三一八〇一・四）を参照した。

(23) 国立国会図書館所蔵本（享保十五年小林新兵衛刊、請求記号一一八・六九）を参照した。七六点掲載。

(24) 東北大学附属図書館狩野文庫・文魁堂刊、配架番号八・三一八二六・四）を参照した。三〇点掲載。

(25) 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本（寛政三年須原屋伊八他刊、配架番号八・三一八〇〇・一）を参照した。三一点掲載。

(26) 国立公文書館所蔵本（寛政八年春波楼刊、請求番号一九四・六二）より引用。三五点掲載。

(27) 両人の関係については渡辺前掲注7書、二六八～二七〇頁。

(28) 国立公文書館所蔵本（文化五年春波楼刊、請求番号一九四・七一）より引用。二三点掲載。

(29) 『仏国暦象編』とその所説に対する批判については、吉田忠「近世における仏教と西洋自然観との出会い」（安丸良夫編『大系仏教と日本 十一 近代化と伝統』春秋社、一九八六年）及び渡辺前掲注7書、三〇九～三二〇頁を参照。「日本古典籍総合目録」に「天文」に分類された書物で最多の九三点が掲載されている点からも、本書の影響力が窺い知れよう。

(30) 「外国」とはインドを指すと引用箇所の直前に記されている。

(31) 国立公文書館所蔵本（文化七年序、請求番号一九四・一三七）より引用。

- (32) 『土佐群書集成 第二十二卷 真覚寺日記 1』（高知市立市民図書館、一九七〇年）一一八頁。
- (33) 渡辺前掲注7書、一八〇～一八一页。
- (34) 「日本古典籍総合目録」に七八点掲載。この点数は、「天文」に分類されたものの中では一番目に多い。
- (35) 国立公文書館所蔵本（加賀屋善蔵他刊、請求番号一九四一六六）より引用。
- (36) 例えば、佐渡の柴田収藏は天保十四年（一八四三）六月に『天文図解』を読んでいる（田中圭一編注『柴田収藏日記—村の洋学者—』一、東洋文庫、平凡社、一九九六年、二二二三頁）。
- (37) 荒川紘『日本人の宇宙観』（紀伊國屋書店、一〇〇一年）二二二～二二一頁。
- (38) 長澤規矩也「和刻本史記解題」（同編『和刻本正史 史記』一、汲古書院、一九七一年）。
- (39) 若尾前掲注13論文。
- (40) 一橋大学附属図書館所蔵本（外題「新版考正史記評林」、寛文十三年元刻・明和七年再刻世裕堂刊、請求記号Yca:1E）より引用。
- (41) 『漢書評林』（一橋大学附属図書館所蔵本、明暦三年林和泉豫刊、請求記号Yca:2A）を参照した。以下、『漢書』及び『漢書評林』については本書を用いた。
- (42) この語は『春秋左氏伝』（以下『左伝』と略記）に由来するもので、昭公十七年に「彗（所ニ以除レ）旧ヲ布ク」レ新ヲ也」とある（『春秋左伝杜氏集解』一橋大学附属図書館所蔵本、安永六年越後屋清太郎他刊、請求記号Ybla:1）を参照した。以下、『左伝』については本書を用いた。
- (43) 一橋大学附属図書館所蔵本（無刊記和刻本、請求記号Yca:3A）を参照した。以下、『後漢書』とその注釈については本書を用いた。
- (44) 一橋大学附属図書館所蔵本（元禄十四年松会堂刊、版心より）、請求記号Miura/Yca:26）を参照した。
- (45) 『節用集大系』第二二卷（大空社、一九九四年）一一一頁。
- (46) 国立国会図書館所蔵本（貞享五年松会刊）の影印。
- (47) 楠山春樹『淮南子』上（新釀漢文大系五四、明治書院、一九七九年）一三四頁。こので述べたのはあくまで由来であつて、実際に参照した書物は詳らかでない。
- (48) (47) 許慎注・高誘注・『淮南天文訓補注』・その他考証学者たちの説を収録した『淮南鴻烈集解』（一橋大学附属図書館注22に同じ）。

館所蔵本、一九二三年上海商務印書館排印本、請求記号
Ydla:12) を参照した。

(49) 『節用集大系』第五八卷（大空社、一九九四年）四〇四
頁。謙堂文庫所蔵本（文久三年山城屋佐兵衛他補刻）の
影印。

(50) 「日本古典籍総合目録」には宝永元年版・天保四年版の
所在が掲載されておらず、内容を確認できなかつた。

(51) 『節用集大系』第八一卷（大空社、一九九五年）一七頁。
謙堂文庫所蔵本（享保二年村上勘兵衛・村上又三郎刊）
の影印。

(52) 「光芒短^{シテ}其光四^ニ出蓬々勃々」は『左伝注』からの引用
とされるが、該当する文章は『漢書』文穎注（『漢書評
林』文帝紀第四）にしか見出すことができなかつた。

(53) 『松宇日記』三十八（国立国会図書館所蔵）安政五年八
月二十五日条。『和漢音訛書言字考節用集』から引用し
たとは明記していないが、引用箇所及び内容が一致して
いる（前掲注1拙稿「書籍とフオークロア—近世の人々
の彗星観をめぐつて—」）。

(54) 朝倉治彦監修『訓蒙図彙集成 第一巻 訓蒙図彙（第一
冊～第四冊）』（大空社、一九九八年）一九九頁。国立公
文書館所蔵本（寛文六年自序、山形屋刊）の影印。

文書館所蔵本（寛文六年自序、山形屋刊）の影印。

(55) 朝倉治彦監修『訓蒙図彙集成 第四巻 頭書増補訓蒙図
彙（第一冊～第四冊）』（大空社、一九九八年）八九頁。
国立国会図書館所蔵本（元禄八年刊）の影印。

(56) 『太平記鈔』は引書名を『春秋鉤命決』とするが、これ
は『孝經鉤命決』の誤りだろう。

(57) 朝倉治彦監修『訓蒙図彙集成 第六巻 訓蒙図彙大成（第
一冊～第五冊）』（大空社、一九九八年）七六頁。謙堂
文庫所蔵本（寛政元年九臘堂刊）の影印。

(58) 卷第一の首題は「和漢三才図会略」だが、他の巻の首題
は「和漢三才図会」となつてゐるため、通行の書名である「和漢三才図会」を採用した。

(59) 渡辺前掲注7書、三九頁。

(60) 和漢三才図会刊行委員会編『和漢三才図会』上（東京美
術、一九七〇年）三〇～三一頁。刊本（刊記不明）の影
印。

(61) 「緯書」とは「經書」に対する書物で、その内容は哲学
・宗教・天文など広範囲に及ぶ。隋の煬帝の時代に禁書
となり、逸文のみが伝わつた。緯書についてはさしあた
り、安居香山『緯書』（明徳出版社、一九六九年）を参

照。

(62) 注52に同じ。公家の野宮定晴は明和六年八月二日、「西漢孝文紀注文穎曰、孛・彗・長三星其占略同然、(後略)」と『左伝』ではなく『漢書』文穎注の説として日記に引用している(『野宮定晴日記』四十八、宮内庁書陵部所蔵)。しかし『和漢音釈書言字考節用集』も同様の文を『左伝注』収載としているので、筆者の確認し得ていない典拠が存在するのかもしれない。

(63) 第一章で検討した『初学天文指南鈔』の引用文と比較すれば、この部分が『初学天文指南鈔』とほぼ同文であること、つまり『天經或問』に由来する内容であることは明らかだろう。

(64) 以上三例については前掲注1拙稿「書籍とフォーカロア

—近世の人々の彗星観をめぐつて—」。

(65) 「東方朔追尋—近世陰陽道書の受容過程をめぐつて—」

(『西郊民俗』二三三、一九九〇年)、「大雜書と民俗研究」(橋本萬平・小池淳一編『寛永九年版大ざつしよ』岩田書院、一九九六年)、「東方朔目耕—近世陰陽道書の読書態様とその意義—」(『人文社会論叢』人文科学篇第三号、一九九九年)、「書き伝えの民俗—陰陽道書の展開

と再生—」(『信濃』五三・一、二〇〇一年)、「宗教現象としての読書」(『歴史評論』六二九、二〇〇二年)、「陰陽道から大雑書へ」(林淳・小池淳一編『陰陽道の講義』嵯峨野書院、二〇〇二年)を参照。

(66) 国立国会図書館所蔵本(貞享三年敦賀屋九兵衛刊、請求記号特二一二七七)より引用。

(67) 朝倉治彦編『仮名草子集成』第一巻(東京堂書店、一九八〇年)四一九頁。両書の関係については、小池淳一「東方朔溯源—近世陰陽道書の成立に関する考察—」(『文經論叢』二八・三、一九九三年)を参照。『安倍晴明記』天文巻が依拠した書物については詳らかではなく、口承された情報に基づく可能性もある。その形成過程については後考を俟ちたい。

(68) 色による分類は『頭書増補訓蒙団彙』『訓蒙団彙大成』にもみられたが、そちらは『孝經鉤命決』の説を一部省略しつつも改変を施していないのに対し、『安倍晴明記』は白ならば凶作、黄色ならば洪水、赤ならば五穀の価格高騰という具合に、日々の生活の中の危機に対応させている。

(69) 橋本萬平「『大ざつしよ』の系統と特色」(橋本・小池前

(75) 括注65書) 二〇九～二二一頁。

(70) 国立国会図書館所蔵本（明和五年刊・安永二年改版、請求番号一六七・六六）より引用。

(71) 求記号特二・三九七）より引用。

(72) 橋本前掲注69論文、一八五～一八六頁。

(73) 国立国会図書館所蔵本（奥付欠、請求記号特二・三九九）より引用。

(74) より引用。『隨一大雜書古今大成』もほぼ同文である（国立国会図書館所蔵本、奥付欠、請求記号特二・四〇一を参照した）。また、『無双大雜書万曆宝』には傍線部①以下的内容のみが掲載されている（国立国会図書館所蔵本、安政六年秋田屋市兵衛他刊、請求記号特二・四〇二を参考照した）。

(75) 橋本前掲注69論文、一八三頁。

(76) 国立公文書館所蔵本（元和八年杉田良庵玄与刊、請求番号一六七・六六）より引用。

(77) 芽星出現を理由に足利基氏が寺社へ祈禱を命じた文書が複数残されている（神田茂編『日本天文史料』下、原書房、一九七八年復刻、五五八～五五九頁）。

(78) 卷上「將軍塚鳴動^井二芽星出ル事」（国立公文書館所蔵本、無刊記、請求番号一六七・二七を参照した）。

(79) 卷八「歲星出現の事」（国立公文書館所蔵本、延宝八年山口忠右衛門富次刊、請求番号一六七・四三を参照した）。延宝八年版の章の標題は「歲星」（木星）となつてゐるが、本文中ではこれを「はゝきほし」と読ませている。

(80) 卷第一「彗星出事附大坂妖怪」（国立公文書館所蔵写本、元禄十四年写、請求番号一六八・二〇二を参照した）。

(81) 本書は出版が禁じられたが、写本として広範に流布しているのでここで取り上げた（横田冬彦「近世の学芸」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座 第六卷 近世社会論』東京大学出版会、三一五～三一八頁）。

(82) 「日本」（酒井直樹編『ナショナル・ヒストリーを学び捨てる』東京大学出版会、二〇〇六年）。

(83) 卷第二十六「彗星・客星出現事」（国立公文書館所蔵本、貞享三年刊、請求番号一七一・一七を参照した。以下『続

太平記狸首編については本書を使用する)。卷第九・卷第十七でも彗星が出現するが、これらは兵乱の予兆とは描かれていはない。

(82) 卷第三「大地震井彗星事付鬪鶏の事」(国立公文書館所蔵本、無刊記、請求番号一七〇・二六八を参照した)。

(83) 国立公文書館所蔵本(寛文十年刊、請求番号一六七・一六五)を参照した。

(84) 卷五「相撲入道弄田楽並闘犬事」。

(85) 国立公文書館所蔵本(古活字本、特一二六・一)より引用。

(86) 「杜預」は『春秋左氏伝』の注釈者の名前なので、ここでは書名を挙げておいた。『正義』は『左伝正義』と思われるが、該当する文章を見つけることができなかつた。若尾前掲注75書、三一〇・三一一页。注82に同じ。

(87) 稲葉伸道「新制の研究—徳政との関連を中心にして」(『史学雑誌』第九六編第一号、一九八七年)。

(90) 笠松宏至『徳政令』(岩波新書、一九八三年)一九一・一九二頁。また、海津一朗『神風と悪党の世紀』(講談社現代新書、一九九五年)一〇・一六頁も参照。

(91) 戸田茂睡によれば、天和二年(一六八二)の彗星出現時、「天に変ミゆるときハ、まつりごとをあらため、民のうれいをすくい、世の安穏なる事をなす」はずなのに、綱吉の政務に変化がなかつたので、この彗星は「出そない」だと「江戸童ども」が噂したという(塚本学校注『御当代記』東洋文庫、平凡社、一九九八年、三二一页)。綱吉に批判的な茂睡の記録のため直ちに事實とは断じ難いが、この記事は、彗星出現後に仁政を求めることが不然ではなかつたことを示している。

(92) 若尾政希「『本佐録』の形成」(『一橋大学研究年報
会学研究』四〇、一〇〇二年)。

(93) 石田一良・金谷治校注『藤原惺窓・林羅山』(日本思想大系二八、岩波書店、一九七五年)二八一页。